

## はじめに

よく「自分流を」といわれるが、筆者は自分の分析のもとに自分の考えにできるだけ従って研究・教育に携わってきた（それでも妥協、妥協の連続だったが・・・）、しかし、「変わっている」をはじめに「奇人」「変人」はまだいい、「ファッショ」「専制」と身近な（いわゆる民主的と思われている）先輩後輩からも言われた。それでも参考までに筆者の拙い実践を披露する。

### 1 教育目標

筆者が目標とする大学の目標は、大見得を切れば「独創と体系化」である、つまり「疑問を提起する学生を育てる」こと、学生が「疑問を提起し、解決する方策を立てられる」事であり、「得た事実と知識とを系統立てて組み立て、そこからさらに疑問を提起して、解決する方法を見いだし

てゆく」といえる。試験はこれを課す事になる。

しかしこの 20 年の教育事情、大学事情は、私流に言えば未完成の感覚系をもつ学生・教員をどのようにして本来の目的まで到達させられるか、またそれは可能か、という十字架を背負い粉骨砕身することになった。

### 2 扱（しご）く＝鍛える

これまでみたように、閉塞感の大きな原因の一つに科学的な「知的欲求」と「知的充足感」「独創性」の欠如を挙げることができ、これは原因の分析で述べたように幼児期の体験の欠如に起因する、と推定できる。そしてこれに乏しい大学生、大学院生あるいは教員も鍛えればある程度回復する可能性があるという生物学的な根拠に達した。

しかし筆者がそこに至るまでには、研究面でも教育面でも、様々な教育関係の研究会を渡り歩き対症療法的に試行錯誤してきた。この過程では様々な方から援助や助言を得るとともに、周囲を煩わせた。そして、定年間近となって、やっと！原点（藤田 1975）に戻り研究も教育も扱く＝鍛える（いま流行らない「扱（しご）く」は激しい訓練を加える（西尾他；岩波国語辞典, 1997)）ことである程度回復することが分かってきた。事実、ホッとしている。そして授業と研究の目標に向かって、以下の幾つか例のような実践をした、しかし、これとて妥協に次ぐ妥協のささやかな抵抗というものだろうと感じている。

まず挙げたい事は「扱き」に理由は無用という点である、理由は自分で導き出せなければ大学の学生、学徒として失格だろう。いま流行の、納得して云々、という風潮とは正反対の「理屈抜き」である。嫌だという者には辞めてもらうまで、という気持ちで向かった。挨拶に

始まり言葉使いから読み書きそして授業, 実習の態度, さらに専門の知識まで強要した. 私の受け持つ授業では私の方針に従わない教員は外した. 案の定, 凄まじい反発が親 (子供が訴えるため) や教員から起こった (理不尽だ, ドクハラだ, 採点された (自分の) 回答用紙を見せてくれない, あるいは試験問題はクイズだなどなど), 直接間接に筆者や学部長まで手紙が来た (むろん差出人の名前はない), 身内, 同僚からもやり方が悪い, やり過ぎだ, 無視など, 散々だった.

しかし, これは親, 教員が学生の成長に対する加害者となっていることの証だ, と筆者は判断している.

授業のない土曜日や夜を使って勉強が遅れた学生への補助講義も行った, しかし筆者への批判的教員や親は一度たりともここへ姿を現したことがない (日本の民主主義はその程度のものなのか, 今風の現実なのか, 「ずるい大人」の無責任体質なのだろう. 地団研の会員もむろんだ!).

しかし, 「扱き」に耐えてこそあらゆる困難を乗り越えられるよう成長したし, するのである. そのような研究者・学生をつくらなければならない. 教員は能力を奪う加害者になってはならないを.

### 3 授業・実習

筆者の教員生活はほとんど歯学部と医学部であり, しかも基礎医学の解剖学である. この学問の特徴は, 人体を分析し (解剖), かつ一個の人体に組み立てて観る (総合) という, 解剖の知識の吸収だけではなく, 医学では唯一「分析と総合」による科学的方法を学ぶと言う重要な側面を併せ持つ. 総合には「地球の歴史」的規模の比較解剖学の知識が要求される. ここでは教科書を鵜呑みにすることなく, 記述の中にある疑問や矛盾を実際の観察から見抜き, 学生と共に考えることを要求される. これを教員には要求した (が, 自覚した教員はいたかどうか...). それができているかどうか, 私が責任を持つ授業はつねに参観し確認した (しかし私の授業には誰も来なかった).

試験は4点主義 (暗記, 図形, 理由, 立証), 答えは一つではない, できるだけ文章で思考を要求する, 身近なしかし気づきにくい些細なことを問題化する, 試験時間は (出来るだけ現行規定を変えても) 長い思考の時間を与える.

講義 (座学) は, (今では普通になっている) 休講なし, 授業の前に黒板に図を描く (当然ながらノートは見ない), 学生へ常に質問をする, パワーポイント物語やプリント配布はしない (解剖なので写真提示のみ), 学生へ課題を与えグループ学習, 発表する.

学生へは学ぶ態度を要求 (私語などの迷惑行為を禁止, 寝るのは可), 実習は学生の望む限り時間を延長する (筆者は学生の理由如何に関わらず延長を, と考えていたが, 実際は部活に参加したくない等の理由やただだと実習室で時間を過ごすという理由で延長を認めなくなっていく). それ依然より, 筆者に批判的な教員は5時過ぎに実習室から音もなく消えた.

質問にはまず学生の判断と根拠を必ず聞いて答え議論する（これができない教員がほとんどだ！）、学習の遅れた学生へは補助講義をする（前記）。全く妥協しなかった訳ではない、否、妥協、妥協の連続のたいへんな教員生活であった。

過去問はインターネットで公開し（しかし、理由、立証問題の答えは学生には出回らなかった。ということは、殆ど教員が学生へ答えを教えていたため、教員もこの手の問題を解けないのだ。まずもって回りの教員の実力を痛感した）、点数や答えを聞きに来る学生には自分なりの判断と理由を聞き、なにも答えられないときは教えない。

研究や教育に関する運営（たとえば授業の担当、研究費の申請、配分、研究室の配分、LAN 設置などなど）では意見は聞くが、自分が分析し判断した結果を曲げなかった。これには幾多の激しい批判があったが、助けてくれる人が現れて（捨てる神あれば拾う神あり！）乗り切ることができた。

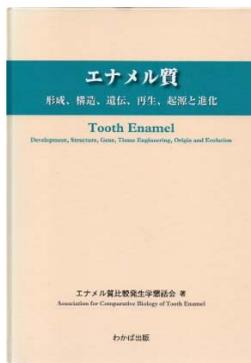
#### 4 研究

学位を取るまでは、与えたテーマの場合はオリジナリティを指導者と折半し（どちらがデータを使っても良い）、それ以降は独立を基本とした。しかし、学位をとってから私のテーマをできるだけ共同研究で行うことを基本とした。オリジナリティはテーマを発想した人のものであるが、実験などの実行者を対等に評価し折半するというものである（研究実行者＝仮説の立証者は大切な共同研究者という考えである）。（しかし研究実行者が自分の発想だ、俺の仕事だと勘違いする苦い経験も沢山した。げにオリジナルはオリジナリティのない人には分からない、研究には知的レベルが要求されるのである）。学位論文は邦語で書きたいだけ書かせ単著とし、副論文は欧文にした（妥協した）。

視野を広めるため、講座の如何を問わず（他の研究室から預かっている大学院生もいるので）大学院生には基本的に海外留学、少なくとも国内留学の経験を積ませた。視野を少しでも広げようとの意味である。むろん教員も同様であり、教室のメンバーは殆ど海外の留学を経験した。

学会等での活動は大学院生も必ず発表し、議論を伯仲させる雰囲気をつくる努力を要求した。昨今の学会はほとんどが形式的な質問で終わるが、筆者の場合はお互いの信頼を持ちつつ白熱の議論を組む、を基本とした。あるシンポジウムの時「この様な激しい質問が飛び交い、シンポジストが演壇で立ち往生し、それでいて和気藹々としているシンポジウムはみたことがない」という感想を他分野の方から頂いた。むろん周りの友人との協力の賜である。このような活動から研究会が幾つか生まれ、そこも議論と発表の場となっている。

発表内容は査読なしの手作りの「エナメル質比較発生懇話会記録（図 a）」にのせた（これは藤田恒夫氏らがつくった当初の「日本組織学記録（1988年に Archives of Histology and Cytology と改名）」的な雑誌であり、氏から「雑誌がなければ自分で作りなさい」との一言もあった。この手の雑誌は他にいくつかある）。



a

a エナメル質の研究者による自前の研究誌 :ここから研究成果の単行本 (bのエナメル質比較発生学懇話会編:エナメル質, 形成, 構造, 遺伝, 再生, 起源と進化, わかば出版, 2009.) が出版できた (20年は絶版にしないとの約束のもと) .



b

b :エナメル質の系統発生から再生実験までをひろく含む研究書. 分子生物学や再生の研究は時間単位で変化するため 20 年間出版を維持するのは大変だろう, しかし今後この手のエナメル質の研究所の出版は見込めないだろう.

研究成果や標本は原則公開しデータはだれにでも提供する (条件はつけないが, 倫理的問題として提供元を明らかにすべきであると考えている) , これは現在流行の特許のための秘密と逆行する方向である, しかしこれはいくつかの研究室で実行されている.

## 5 明日へ向けて

時代, 技術が変わろうと研究, 教育の本質は変わらない. 研究は真理との距離, 教育は学生の能力を引き出す努力, が唯一の尺度である. 真理へのいざないには地味な努力が必要である. 地味な努力によるデータの蓄積が無ければ新しい発想はない. これは, 智の喜びを味わう気持ち, 科学的な「知的欲求」と「知的充足感」の裏打ちがあればこそなうるのである.

これが揺らぐと, 環境に流される. この基本は幼児期の無数の刺激によって担保されるのである, 即ち自然の中, 異年齢の中の集団における遊びによって育まれ, 高等教育によって視野が広がり真理探究への科学的な揺るぎない情熱となり, 情熱が維持されることによって結実する.

研究, 教育には厳しい「鍛える=扱 (しごき)」が必要である. 「扱き」を恐れてはならない, 叱責の言辞の善し悪しを云々するむきもあるが, どのような言葉であっても厳しきは変わらない (どのような言葉だろうが聞き入れられるように訓練すべきなのだ) . 「扱き」に耐えられる精神力と体力, 柔軟性が「知的欲求」と「知的充足感」を誘うのである.

今, 学会誌は英文化の一途であるが, これに対して無査読, 言語自由の研究雑誌「エナメル

質比較発生懇話会記録」の質は高いという評をもらった。さらに（今の流行に外れ、かつ狭い領域の）研究成果の単行本の出版（図 b）までなしたのは友人との貴重な共同作業である。そこから、筆者が師としている井尻正二氏の歯の再生（井尻，1968，井尻・秋山，1992）に対する再評価がうまれ（残念ながら地団研ではない！），哲学書を読みたいという相談もたらされている。これが筆者のささやかな「閉塞性」へのレジスタンスである。

教員は、すでに医学領域では常識となっている失敗も成功も含めた臨床報告のような、あるいは症例報告のような赤裸々な教育実践記録を出し、本音で語り合うべきだろう。授業や実習はその場だけの感動や感激でおわってはならない、苦しくとも 20 年 30 年経たときに楽しさが滲み出すものである。学問的な楽しみとはなにかを極めるべきだろう。せめて責任が楽になった定年教員に自伝的なこのような記録や反省を、と望むのは非常識だろうか？本稿が他山の石となれば望外の幸せである。

そして教員は教えるより学べ、地道な研究を厭わず、地味な努力を評価する実力を持たなければならない。地味な研究でも社会的価値は先端的研究と変わらない、必ず評価する人がいる。生涯一学徒である！

柄にもないが格言を載せさせていただく。学生は、次の世代を担う自覚をもち、「学べ、学べ、そして学べ」（レーニンの「学び、学び、さらに学び・・・」（レーニン、マルクス・レーニン主義研究所訳 1968）の改変か？），学ばねばならないこと。そして「学問にとって平坦な大道はありません。学問の険しい小道をよじ登る労苦を恐れない人々だけが、その輝く頂上にたどり着く幸運にめぐまれるのです（資本論フランス語版の序言）」（マルクス b，社会科学研究所監修，資本論翻訳委員会訳，2008）。繰り返すが、厳しい扱（しご）きに耐える精神と体力、そして地道な努力、これ以外今の状況を抜ける道はない。学ぶ方法は私の知る限り団研にある、「扱き」のある団研活動こそ次世代の閉塞性に楔を打ち込む原点である。

おのれの道は自分で決め責任を持つ坂本龍馬 16 歳の句「世の人は我を何とも言わば言え我が為すことは我のみぞ知る（原文：われをなにともゆあばいへわがなすことはわれのみぞしる）」（坂本龍馬：詠草集，宮地佐一郎，1995），カール・マルクスの 1867 年の一言「なんじの道を進め、そして人々をして語るにまかせよ！（資本論初版の序言）」（マルクス a，社会科学研究所監修，資本論翻訳委員会訳，2008）。真理は洋の東西を問わず同じなのである。

ただし本稿はあくまで大学の視点からの反省であることを再度記しておく、が、その本質は他の教育課程でも同じであると確信している。

#### エピローグ

故井尻会員に教え＝躰られた数々のうち、わずかに「さん」づけの呼び方だけは身についたか？ これだけは筆者の体質とあったのだろうと。それ以外は「話してもだめ、教えてもだめ、実践してみせてもだめ・・・（井尻，1981）」だった。（研究など）殆ど裏切ったと後ろめたく感じている。

しかし今、師を持たないことを売りにしているニューセオリー症候群の若手（歴史を見ず

自分の発想だ！という)の人々より,師を持ち古からの仕事を受け継ぎ伝えるのがどれだけ自然で幸せだろう.

定年を迎え,さぞかし,批判の矢面にたつだろうと予想していた.しかし案に相違して,落ちこぼれ学生が立ち直り,大学院進学後あるいは卒業後に顔を合わせると「また先生の授業を聴きたい」といわれ,実際,子連れの卒業生集団が授業を受けにきた,電車の中でイカツイ(ヤクザ然とした)人が追ってきて緊張したが「先生の授業は良かったと伝えたくて」と告げられた,卒業生だったのだ.

電車で隣に座った妙齢のご婦人から話しかけられてどぎまぎしたが,かつての教え子だったとか,「もう一度授業を聞きたい」と言われ驚いたこともある(筆者の授業は後から役立つから聞き逃すな,という先輩から後輩への言い伝えがあるらしいことを,後から知った.他はなにをしているのだろう(?)というささやかな疑問をいだきつつ・・・).

このような経験を必ず年に何回かする,これはまことに幸せだと感じている.しかし親や教員の庇護から離れられない甘えの学生は惨めである.

現役時代,たまに筆者の授業に外来講師を呼ぶと学生の講義を受ける雰囲気「すばらしい」との感想を頂いたこともある.他大学への講義の経験からこれもあながちお世辞だけでもないだろうと受け止めている.他大学の講義のとき筆者の方針で行ってみると(8割の甘言を引いても)好意的な学生の評を頂いた(例えば,情報を仕入れるので精一杯の堅い頭をかち割ってくれた,などなど(筆者のホームページ [odontology@sakura.ne.jp](mailto:odontology@sakura.ne.jp) で公開). (私と違う講座のため)遠くから筆者に反発し批判していた若手教員や事務の方が,学生支援活動で行動を共にするようになると「身近にいると先生の考えがよく分かる」と励ましてくれるまでになった.有難いことである.

幼児教育の考察に基づいて,我が子にテレビやゲームより自然の環境をことあるごとに押しつけた.その結果「ノスタルジアを感じる子供だ」「一昔前のほのぼのする子供だ」という感想を得た.これにはしてやったり!と,ほくそ笑んだ.親の目から見ても素朴すぎる普通の子なのだから,しかし学年が進むうちにこのような普通の人間のいる場が少ないのに気づいた.筆者としては時代の状況を見逃した,苦い反省の一つである(しかしいま密かに孫の教育の案を練っている??懲りない面々である).

研究面でも,幾つかの研究や研究形態(国際的なデータ共有による団研的(?)共同研究など)は完成できなかったが,いまデスマスティルスとゾウの歯の進化問題と歯の形態形成原論の補遺的な仕事(進化論への道)を進めている.前記の通り後輩が,シンポジウムと仲間作り,若手教育をすすめ,そのうえ自らの研究を「ノーベル賞の研究は確かに優れている,しかし自分の研究について社会の一構成要素としての価値はかわらない」と自己評価出来る後輩が確実に育ちつつある.

かてて加えて家内から(定年になり)現役時の「ため息が止んだ」とホッとされている.まずもってささやかだが幸せであり,さらなる研究目標へ挑んでいる.

## 謝辞

これまでお教えを受けた方々は数知れない。その殆どは幽界に去ったがおもな方々だけを挙げさせて頂くと、井尻正二、大森昌衛、柴崎達雄、三木成夫、平光厲司、萬年甫、平井五郎、桐野忠大、一條尚、亀井節夫、等々の（殆ど幽界に去った）諸氏。そして活動を共にした地団研事務局の方々と事務（当時）の矢野汲子さん、現在いっしょに勉強をしている聖橋会、歯の発生の会、フロンティア会議の面々、東京医科歯科大学歯学部解剖学教室、埼玉医科大学第二解剖学教室、日本大学松戸歯学部第二解剖学の教室員の方々、そして化石研究会と長鼻類団研の方々とその他の（かつての）学生を含む友人の方々である。日本共産党中央委員会付属社会科学研究所には文献で御教示を受けた。ここに深謝する。この内容の一部は、2012、2013、2014、2015年地団研総会のポスターで発表したものである。

## 参考文献

エナメル質比較発生学懇話会記録：現在 1 号（1989）から 11 号（2011）まで発刊されている。

エナメル質比較発生学懇話会編（2009）エナメル質、形成、構造、遺伝、再生、起源と進化、わかば出版。

藤田至則（1975）頭とハンマーで、玉川出版、東京。

井尻正二（1968）化石、岩波新書、東京。

井尻正二（1981）銀の滴 金の滴、築地書館、東京。208p、

井尻正二・秋山雅彦（1992）化石の世界、大月書店、東京。

カール・マルクス a、社会科学研究所監修、資本論翻訳委員会訳、（2008）資本論、第 1 巻、第 1 分冊、新日本出版社、東京、14 p.

カール・マルクス b、社会科学研究所監修、資本論翻訳委員会訳（2008）資本論 第 1 巻第 1 分冊、新日本出版社、東京、32p.

西尾実、岩淵悦太郎、水谷静夫：岩波国語辞典 第五版、岩波書店、1997。東京。

レーニン、ソ同盟共産党中央委員会付属マルクス・エンゲルス・レーニン研究所編、マルクス・レーニン主義研究所訳（1968）レーニン全集、第 4 巻、大月書店、東京、301 p.

坂本龍馬：詠草集：宮地佐一郎（1995）坂本龍馬の手紙、PHP 文庫、東京、558 頁。

日本組織学記録 1988 年から Archives of Histology and Cytology と改称。